櫻齋房種恵圖
三編下
岡本勘造綛
其名も高嶋
毒婦の小傳
東京奇聞
三編中
芳川俊雄閲
三編上

芳川俊雄閣
三編上

A464
7

其名を
高橋
高婦の
小傳

東京奇聞

第三編上之巻

芳川俊雄閲
岡本勘造綴
桜齋房種画

島鮮堂壽梓

生田の森は夫ならでかへ色見ると賛賞す花の大哥乃加勢我
頼ミに一人さればなり功名せんと場數に馴し老将に路を譲らぬ野猪
武者わきめもふらぬ一散走りツイ深入して最三編既に数十丁の紙地を
陥入今さらに引にむられぬは是ぞ所謂生兵法かゝ大傷の素よりも未熟
は知るこ其上に粗々しきも早いを勝とし文も訂さば部となすより
一層骨我をりくは額の汗乃志ることは語路の廻しも有明の燈火の
下で書終る帷幕の内は計畧は誰も知らね出板の冊子は早く人に
知られて陣太鼓のドンくと賣口のむやみに進むは是ぞ全く島鮮堂乃
さいたひよれに依るなるべし

明治十二年三月初旬

岡本起泉題

冨岡と俗謂人
小沢伊兵衛
藤川村の寺子屋
尚古堂松齋

高橋於傳

○六馬は桙索のよく所をする所に
あらはしたるや初めて氏なり要次郎は
荒る娘と綽号をする右傳の聟
となりたりしが生涯よりおでんか
共に枕さへかたさぬは元より
人の進まぬ上に麻物語の
一云に要次の忌死と云[板]
ゆゑ祈る事と連そぐ一生
ノの尻につれぐろのあぐる
事なるらんとおのれ計りか
名に前は実母の雜縁の
仇がてき恨をかさなる要と
いふ文字なるを志きらひ◐

◐一日も例にある事は何ぞ心に▲九右衛門の妻婦は聟
面白かりぬといひ出しては
後へいひる強情我慢その
翌日からは定に居つゞれ朝
きつゝて涯おそく帰るが
網戸へ一人で眠り我が漢いて
宥めをさせど肯がこそ強て
要次郎と夫婦となれといふ
なるなら私は定に出りませぬ
只何となく那人を夢をに
りつゝいやなりといふは日頃の
我儀ならんと字の毒なぶらの▲

要次郎へ仔細を咄し
娘の心の和らくまで辛抱
しと和むにつけ素より
律儀一ぺんの要次郎四日
五日は嫁へそ居ぐが右傳が
おしも打解を云ふさへも
かたさぬは全く心にうるはぬ
事とおもひきり嫁人あらば
親里へ云[反]て我から離縁
を乞ひるを九右衛門夫婦は
本云[反]とおもひ故儀なき
事なれば此ことの遠ノ

次へ

98-7952

つぎ 雛祭を せゝとおでんに 表二びき 丸燒完ゐて 我住うらの田 ☒云のんでる 祝ひまきの俵きて 積ひそ積まる 二十四ぢう

ひまの家東 可愛の膝をあつめ 姫ありの国るとゐのい 世間の祝とゑ翁 丸帝祭ま姫 おゝのつゞ他人の中へ

ゑのの中 時近辺お安男ふ と行判さうで優男 村の役守 のおかれや

出しこうくあの強情の 和かくとと人と称ん で近村の或百 姓家へ 年公 さもしが 何れ 行てる十日 と長つゞ 或ひい 先

御祭禮

うろのとゐ出さ見又い 月かで逃久る ☒

あひとりうろ深ん 同村の弓指代助ご二男 波の助とくるい

▲ 目待ゆこゞれさ 行路 人目 しの 無んぜ 猫 叢 の法

☒その 征判のるく るあど果い伝久 ☒

七ツ半時七九ろう支称ハ つゞく

膳ゑを洗さく 村の長焼連ごうくゆ

つぎ

心に恥こび実否を
探るに此頃はお傳の様子
もいぜんとうわりいひつけ
ねども化粧や髪の飾り
と意やかうといふは焦る
意人のあるうあらぬう
夫とまくあてんを母が
側へよびいつぞや生方は
其方にある之事をは
のくぬといひあつてが
今年は丁度其方に
あれば聟を迎へて
安祝にたやく安心

☒嬉しくてハイとばかりの
挨拶をいんてとる母の
面色で夫々
先へ渡し
をつけ波之
女を
お傳が
聟に
迎へしは
明治二年の十二月
心よろなひし男
ありとて

⇧お傳の恥こび
大きなるなぬを見
可する九右衛門
夫婦も安心

させてぶらぶらい
けどろ外ぶ
出しがあつて
代助どんの二歳不息
波之助どんは新ての通り
標致もよし手もなく
かゝ見る利口りの
なんと事を
に苦ふ人は
あるまいうと母親の
云葉は兼ての溜行
を知つていかのう恥うしの
歳の下霧おもひは胸にあぬうといへば☒

して啓事は
月日を送る
うち翌年
明治三年
の二月頃
より波之
女の

面体へ悪
しき種物が出来てこそ

つぎ 次第に顔がそれあがり
眼がちが燥まて睫毛が
ぬけおち眉毛が薄く
癩とよぶ世に忌ひしき
病ひが発し以前にかわる
面相を初めは夫と知ふ
ざりしが段々血統を探つて
いると波の助の実父代助
は若子まで生実父
何来は先年癩病の
発せしゆゑ村の老人も
知らざれば廻国順礼に出て
途中四国あたりて死去

▼一丑
夫婦の約を定し借

せしとの事に叔は生前
にてありしよとかづいてい
九右衛門夫婦おぞめを
ふるひ御傳ゆゑ交替でも
あるが自分から嫁へあげて
聟なれば夫といひにいひ
なりて祝切らしく看病
をせることなかんとあふに
いけ祝妖中へも相談して
波之助を離縁することに
取きめお傳へ生よりを
語ると似ての外に折嘆き
是は情なれ作せるな▼

老の繋りを結ぶ
上からは生死▲

▲さへも
一面にするが
女の産ときく
夫が如何なる病ひを
やむとも自分求めしとなかねば
治らぬまでも奴抱をするが女房の
役目であろ離縁なぞいはれは
よらぬと又しても例の強情を◐

◐いひ
なるに
九右衛門
夫婦も
困じ
せて
たぶ
一通り
の病
言なら
如何程言く
も離縁は
せねど
つぎへ

九

茶の世始りより初
夕の起臥にをけ必抱
ふ時うつられと医業の
ちるしもくるる由
業病のおらぬ事と
昔しうう作きみ
ごもゆしの振く
うさんとそんを
くすす精合を
とるときのすの
手限を助け
ひとう此事と
ゑんごと九右衛門の主婦ホ
時うれて二月二日朝さえも
うろく今さ
過甘ーぶ迎由
ふく由病気
ふよ死ぶ
ましと嘆のと
お徳ぶ出て云
うぐさふ手紙
うろく
ふす
うう
帝そおうさと

岡本綺
事
御世ん茶
よ字茶末
いそせ数の手とも必ず仕おかく
うらおく此家ホ
あるも甲斐
うぶん
お徳ぶ円
ひとの来愛うる
遠ぎろう旅
うらたびで
良
医ホ
湯治
坊
うらどで
疲治をせば
ふ倩へのなぎね
うらくへ
ふ祝
ん祝さ
祝へ

▲僕らの路用を貰ひ
らけ寫るまの
まを或て下牧
村を立出しハ
当年の十二
月それと
行法ハ定
めねどお僕ハ
何ら愁笑の
ありの歩
こゝに見る
らぬ寫ひに
性む彼ゝ助

（つゞき）武蔵下総の界ふ細て東へ入る邑あり郡の
茂門村ハ梁田の在にあるとぞて家禄ゆゝしき不審
安宅寺の元蔵ハ兼て寄附信録のあるのみなれバ
一夫婦を粗末んと夫婦ハ猿ゆ田を守る
漸くにして幸安寺へ移りつ元蔵
宝善和尚ふ面会なして
途中で取こしらへたる八丈九ツの
が紙手紙を出し云業巧をゆ
折葉き夫の病家の保居のてあ熱網の
遠路をたのミしがえより良遂の和尚故
夫婦が祝と飲むやく家出をせしとぞ
為し あらバその紙手紙を出とあし九ツ
どのく事とあるが心ありそくいつまで

○幾々保居をたまされ
あと事ゆおかぜんれ
あきをはしつりと
まと波之妙
音ゝ化粧
しく

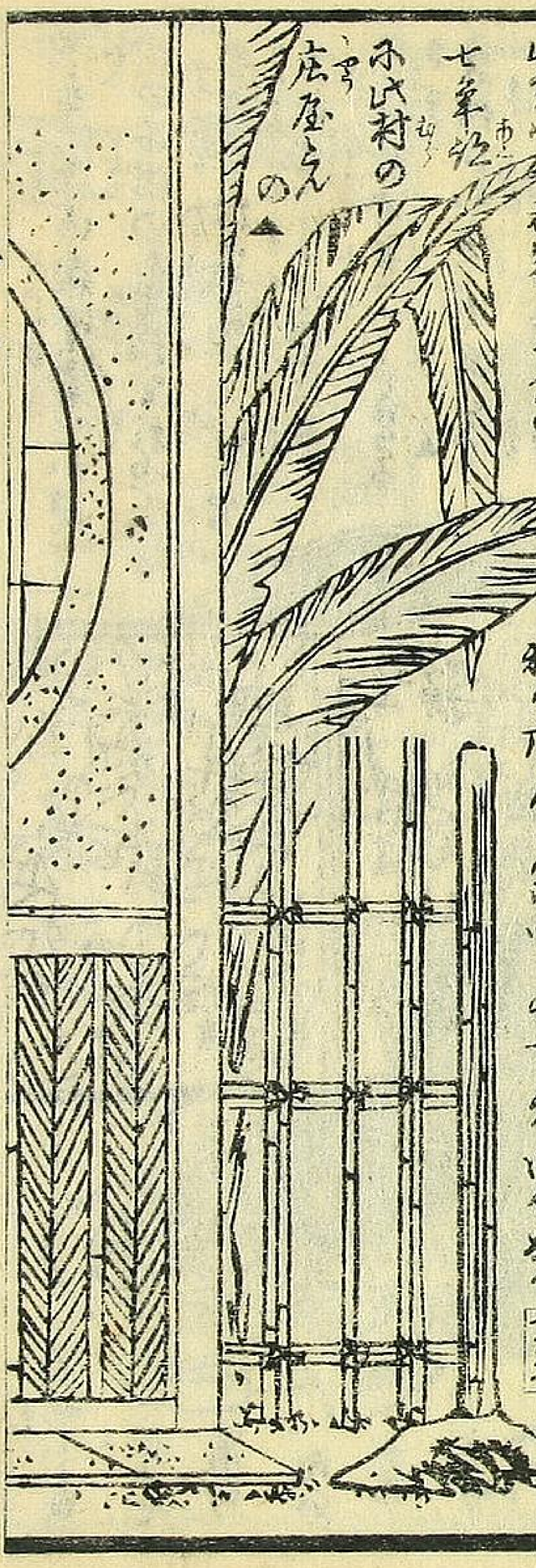
東京区分絵図	全	鹿児島記事	六冊続切
命之巻浮世善悪鏡	全	獣類一覧骨牌	一組
海原櫻梅松録	十五	色入小本	数品
単語面解	全	漢語骨牌	一組
大功記名之傳	四冊	善悪振分雙六	全
其名も高橋妻婦之小傳 東京奇聞 追々出板			

地本錦絵問屋 板主 綱島亀吉
編集人 岡本勘造 麹町区壹番丁廿七番地
浅草瓦町十二番地

010190510730

其名も高橋
毒婦の小傳
東京奇聞
岡本勘造終
三編中

A46K
8



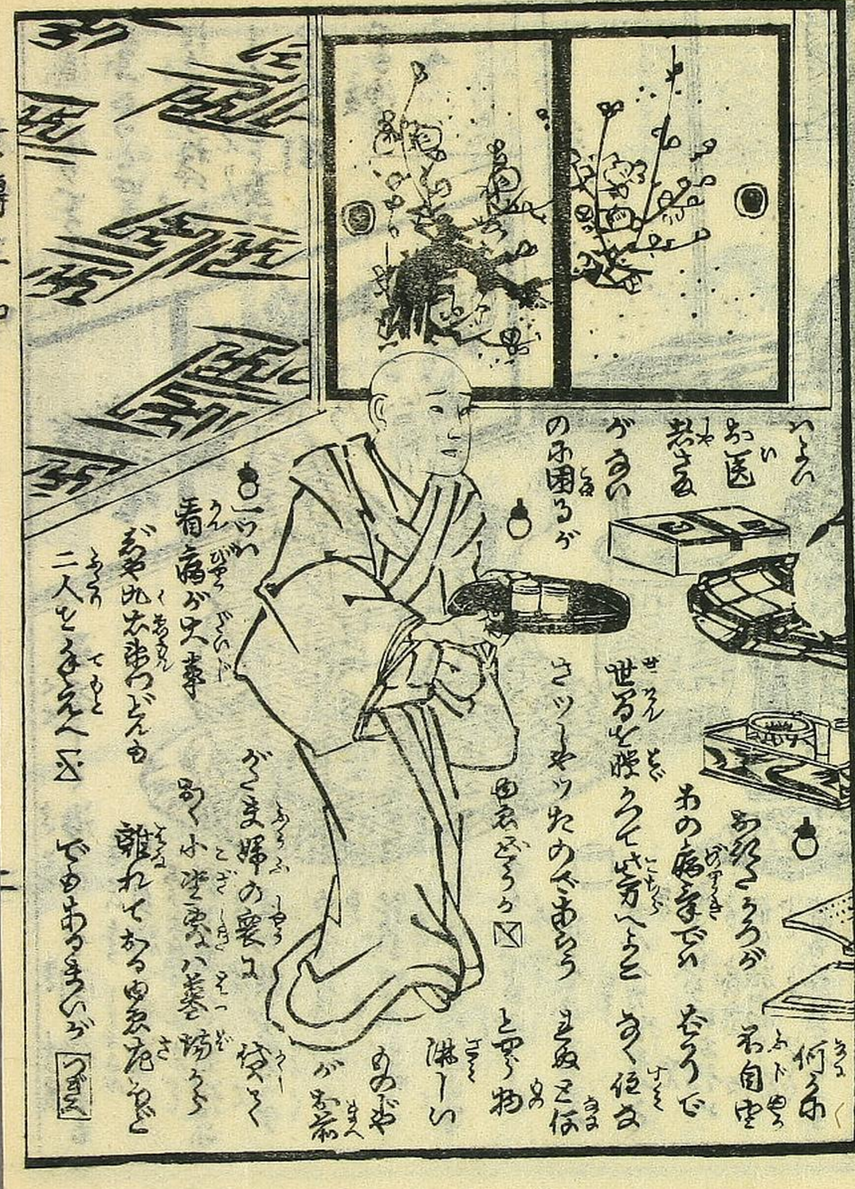
○これつく、お伝さんか丁度よい所じや▲所へござつて今私が近付になつて段々のお咄し今も此事を先生と奥様の噂を承ると手跡の指南で暮して此村に落付なされたとしておつくさまアノ此家へと和尚仰有るハ左様ならば此寺の先住が村の子供空き寺がいよい仕合で和尚ハ衆に手跡の世話をしておつくだされたが先年亡なられて其所へ来り此節の客に村中に寺子屋がないので子供たちが大勢までさて上へ陰礼するを和尚へ御頼み出まして何やら書てあるに困ておつさ所へ此方へお客じやらへ私が庄屋どんに出して丁度頼であるつ〔つぎへ〕

七年跡市ヶ村の庄屋どんの▲

48-7953

つるさき寺の雑士者をおばさんて
村の子供のお世話を致すである
尚右衛門さまと仲よく
なんぼでおまつの美事
のろう紙や親句もできる
きさ子姫さまお帰しやらこう今
お茶の吐しをあげよう尚
門不人情の七男世の中
ゆえ表へ出ろ女子ぶやみ
うつて一度ゆめて参ろ
と仰しやるほかやらふ
とおのこおやぢ波の女
どんぴどじやおしの伴ん近あふ

何ぞ有自宅
あの病までの
世るを聴うてさ方へよこ
さつーやつたのくあらう
ぶ女ごとう物
ぶーいのやの
が茶



お医者さまがうのふ困うが
一ついい看病が大事
ぶやぬ女房つどんも
二人とそえん
ぶ女帰の裏口
ぶーく
ふ少ぬ茶
雑れてある女庵ど
でもあうまいが

つづく

ひざ
ひざ
まぐやつと四五日
にうまうねば淋
しくが無く暮い
いふぬ小僧
でも通り
ゐ▲
空

▲あげやうとハ云ひの
若い夫婦ハ結句二人組
者がよいうも知れぬと笑
ひまぐらの咲しさへ親切こゝる
和尚の云義ふにお僧ハ幾度か
礼をのべ
改まれて
松高へ挟
投をして
☒近付とまり
の病気を
同いる程は
○
○
虚か実か
涙まぐら
ゐお僧が
行釈切にいいるを
姉しれ事とまゝらんわく
松高方へ寄伝るが三度
の合ハ寺
黄八葉ハ
小僧が
夕ゐ実が起臥の
次

つぎ

女花のこゝあれば御傳は日長の佳趣を慰さめかねて和歌の誓ひ古にもしてみんと松高へ指南を粧ひ百人一首の俳称からてにをは生徒の弄まん歌をあらふて

咏いづれ十一文字も初めの猶い鶯喫にまづふ鄙ぶりもえより

さしき性なれば恵しとうけてハ咏恵し

遐々傳行をつゝけるうち　思不云意と

といふ歌

にて

一戒あひ

うちあけて

▼殆んど稀なり

先容次女麗麗

▼哀をなさらば性質多情なるも容姿醜悪なれば男児を惑はして生歌を恣まくにするを

とそあつれども

知らぬ人につゝむくらしさと咏出し

なれば松高も生上達の事にを巻め

尚も出精せんしとの事に会ハ御傳も

面白くなりて此程ハ出一途に奇

よむ事に解急なりける

○外面如菩薩内心

如夜叉とハ俳が

毒婦を形容の

名云にて古しんより

毒婦奸婆と称する

者に生容姿醜悪

にして多情なるべきハ▲

◐なるも

性質多情なる

ざれば能く一まに

安んじて▼

婦ざれば

麗はして多情なる能く

男児を惑し恣まく

に生情欲を達しける

を以て身の奸悪に陥る

を見ぶ彼を欲き是を

極ひ遂に法網にふれて

毒婦の名を後世に変

むるに至るハ涉るしても亦

情もなる。御傳ハ天姿英麗

にして殊に多情の性質なれど

是までハ能く恣恵び生情欲を恣まく

にせざりしハ深き仔細のあることにて

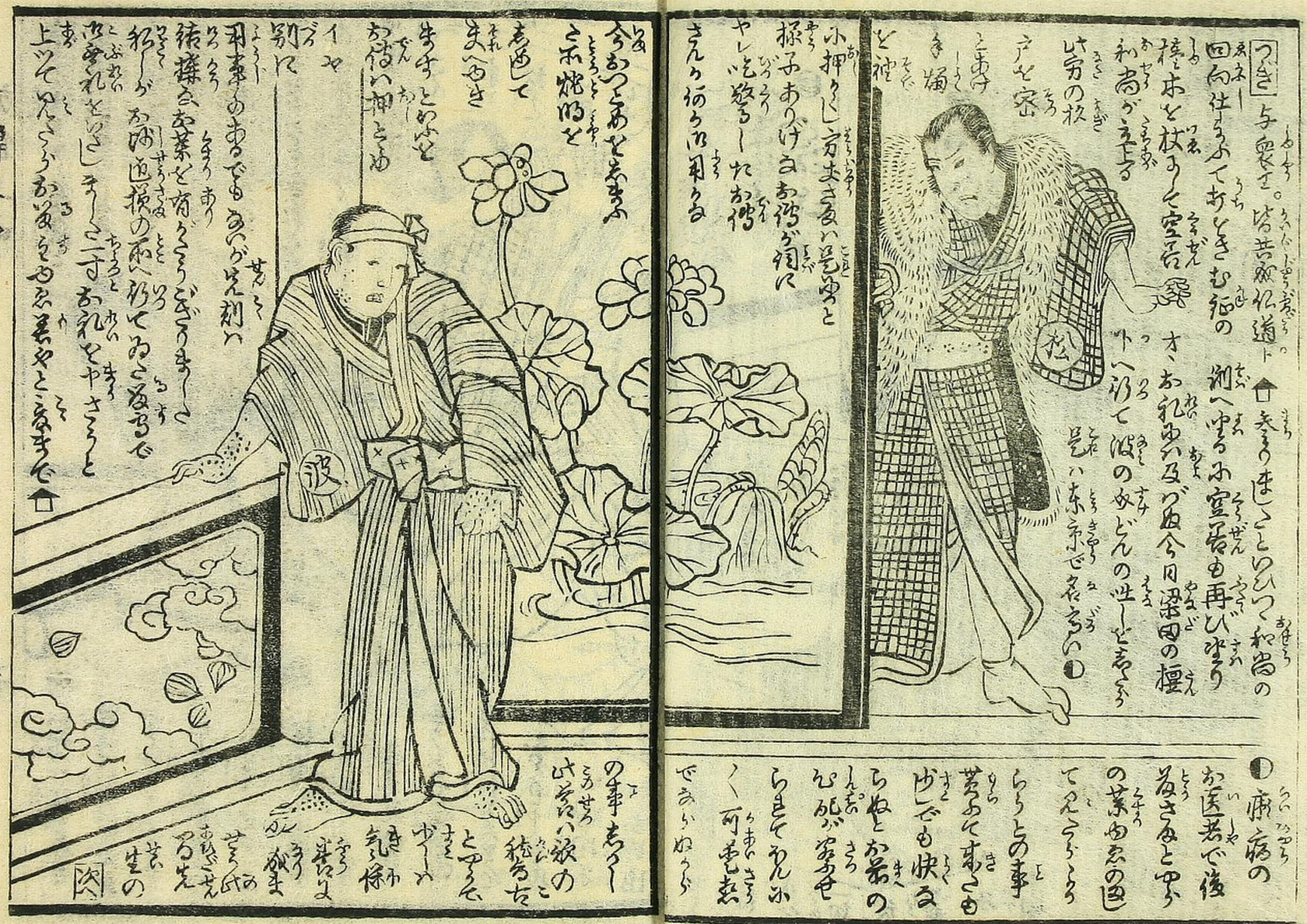
次へ

閑木
つぎ
病る
まを祝切
らしく女抱して
離縁を望く拒ゝ
真女節婦と▲
◎お傳は喧
安の祝ひ
遂思ひまとお
明て
にゆく
来を
笑り
そめ
る
松高
も五十
路に

人に出せ世に厭はるゝ癖病のまを嫌しに故々を
立去り行先々で十分にこれの愁を達せんと根つゝ
こゝし事ありとあらば故々を出しより以前の
如く波之助を大事にせば人の
前ではあれや角と心をこそすやう
なれど是向ひなる物なども
むさくらしいの様なのと
罵しる事も彼々なれど
波之助は是情られ奴を仕合せと更に
別に気にもこゝめば終夕世話をうけるうちお傳は
此に和尚の稽古に身を入て松高が許へのゝ通ひ
つゞけて折ゝは夜の更る迄海分夜との事はいつしか◎
傳
能もせで
次へ

つゞき
今日は用事がある程に意ゆて仕舞と断つれば何れも嬉しと寺子等は
▼引辺戯む
ちゝのを逃ゝとませども村で
堅く追いと信用
せる先生さまと
真女の名ある お僧
との呉向ひなるを見る
こても秋の稽古か
漢物の指南で出ると
人々が迷ひ悩しと思ひ
放放二人が中の駄し
と知る者とてはなりける
○孫陀に接ぐる桃明の光

▼お坊道
横さいなら
と吸ひ込へ
お僧を
つゞ
ゆ
綠
久を
一向
法
霊
に
手向
つ
ゞ
以
功徳
普及於一切。
我等
次へ


つぎ
与喪主。皆共祝道ト
回向仕ふて打とき む征の
樒木を杖にして空居
和尚が立たる
此方の杖
戸を密
こあけ
手燭
を袖
小押かし方丈さ夜ハ是ゆと
様子ありけるお侍が同に
ヤレ吃驚したお侍
さんか何か用かな
オ、お礼ゆハ及ばぬ今日梁田の檀
ト入れて波の女どんの吐しを志てか
是ハ東京で名高い
◐
疾病の
お医者で後
夜さなとゆか
の葉由志の図
てんこうらう
らうとの事
芸ふて来たも
少しでも快な
らぬとお前の
心配が案せ
らまてそんに
〳〵可愛志
でなかぬから
今おつとめを志まふ
これ炮烙を
志めして
夫へゆき
ますとゆふを
お侍ハ押とゆ
イヤ
別に
用事のあるでもないが先刻ハ
結構なお茶を有がてうございました
私しがお御道様の所へ行てゐて夜寄で
御無礼をいたしまして二寸お礼をやさうと
上ツて見たらお夜を申ふ其やとこなまで
の事志なし
此言ハ欲の
稽古
とゆうて
少しハ
気保
菩提
成ま
其氏
当先
生の
図

つき 藤一お京の欲と
くるいやうすみのごくあくさ
さるひどう笑ふてく
あくてつ[illegible]ろいやさ
なすき夫や「我が
おおけてこそ家れとも
あらまん人ゆつむ若い
でありこあやん
さん 私へ
欲
い
ゆ

図 お作い藤ろうき
渡ろの方をねん入
さるぶうこんぐろ
お寺のかやをい
き
な味がかろいと
膝ろりやをそ
ろの私へ方
えさるへあげ
きうとそ涙ぐの
れどもろうそ
おそもやさ板
心肉ゆ
おゆ匹

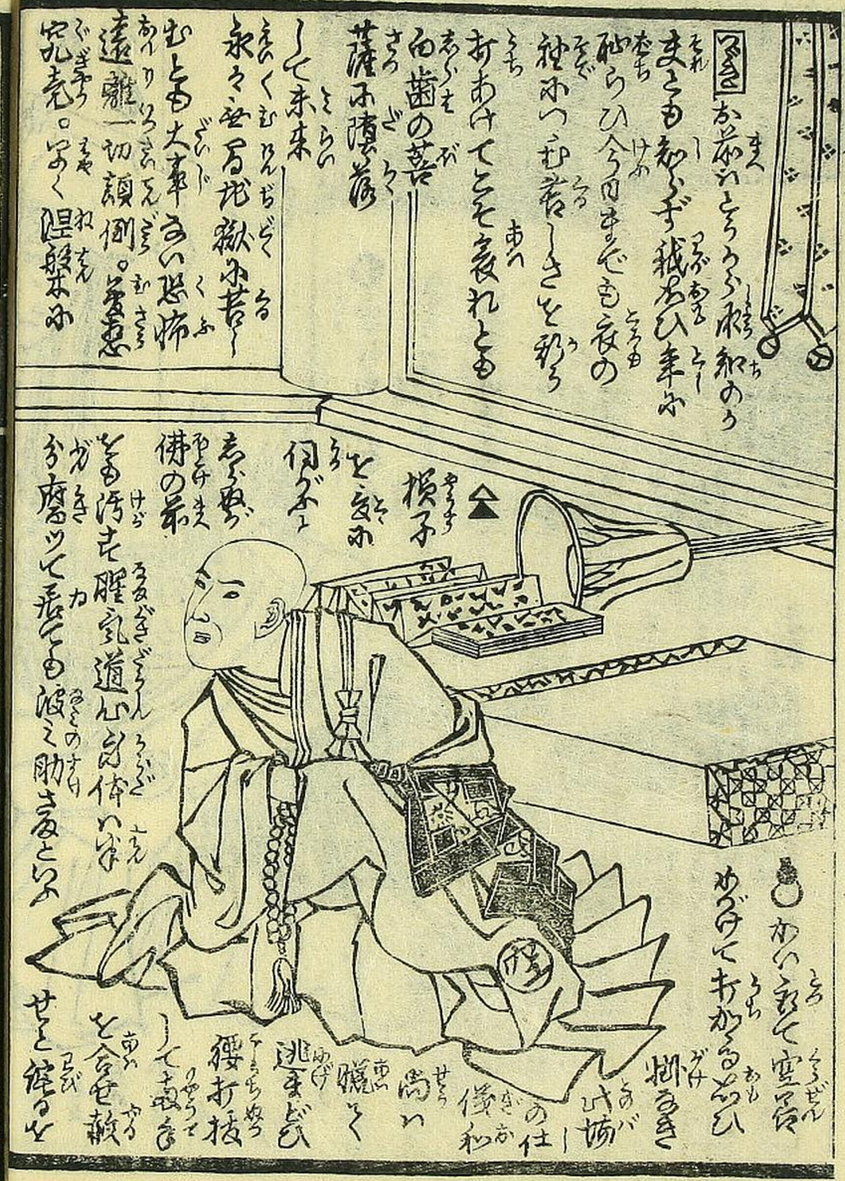
欲の
気つ

◐からぬう面白
さうなばよのこあどう
いう意味でありまち
なとひそうなく
の位牌の涙で嵐が

ゆ図

さんうう
お坐ー
ふうこと
のぐ在
ます板
おおし
なす

兄
俯白
おせうこう
和尚い姉ー
うまんぐう
ぐまとあじしうの
欲へ

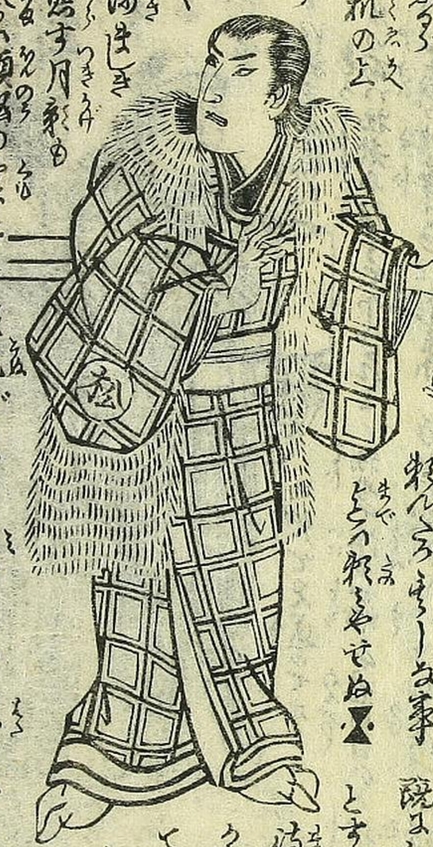


[ふき] おかねところろう形のうまさも知らず我が人来ぬ
砂らひ今日までも夜の
独みつむ者しさを知うち
あおけてこそ哀れとも
白歯の善さ薩摩漬物
しても来
永々世界地獄小者
むとも大事の恐怖
遠離一切顛倒。究竟
究竟。涅槃

▲ 振子

とをぬ
何ごと
高慢
俳の最
汚土服
磨ツて
の仕
儀和
尚い
嬲く
逃まどゐ
獲お抜
して
と合せ敵
せと縛る

おかねとて宮家
めづて行かるのうち
刑きき
ばか
悔



今うとのとお侍がまとうり
うする
機ごふ
鏡持れの上
うふさだう
るも

ヂヤラ〳〵
凡夫の海はき
生の如を照す月影も
張ぬて今の煩悩のをと
雨とうかんとおろ
河弥陀の後ろよ数ゑつそ
落入ろでおろうと先きろ

▲

高とのの事女を捕ふて不将
前ぶ世活ふろとい
釈ぶまろ一当事
とう釈ぬ

▼

昔びそまのる
お侍や変大郎
て波ふ放
ぬ
ぬ
ぬ

▼

已どうするうてあろと悟ろれ
ろ指止られ
と波ふ放せと
ぬ
ぬ
ぬ

▲ 次へ

東京区分繪畫　全
命と養ふ善悪鏡　全
落所櫻梅松録　十五
単語畫解　全
大功記名々傳　四冊
其名も高橋毒婦之小傳　東京奇聞　追々出板
鹿児島記事　六冊讀切
獣類一覧骨牌　一箱
を入小本　数品
漢語骨牌　一箱
善悪据分雙六　全
地本錦繪問屋
板主　綱島亀吉
麹町区壹番丁廿七番地
編集人　岡本勘造
浅草瓦町十二番地

010190510749

櫻齋房種重圖
三編下

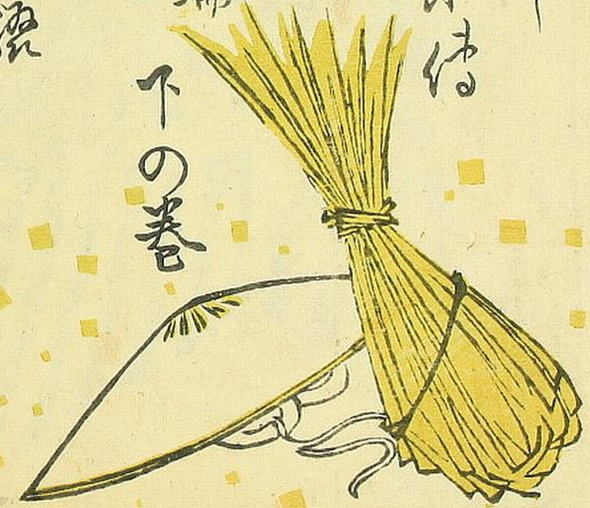
A464
9

生名も高むし
妻婦の小結

東京孝家

三篇

下の巻



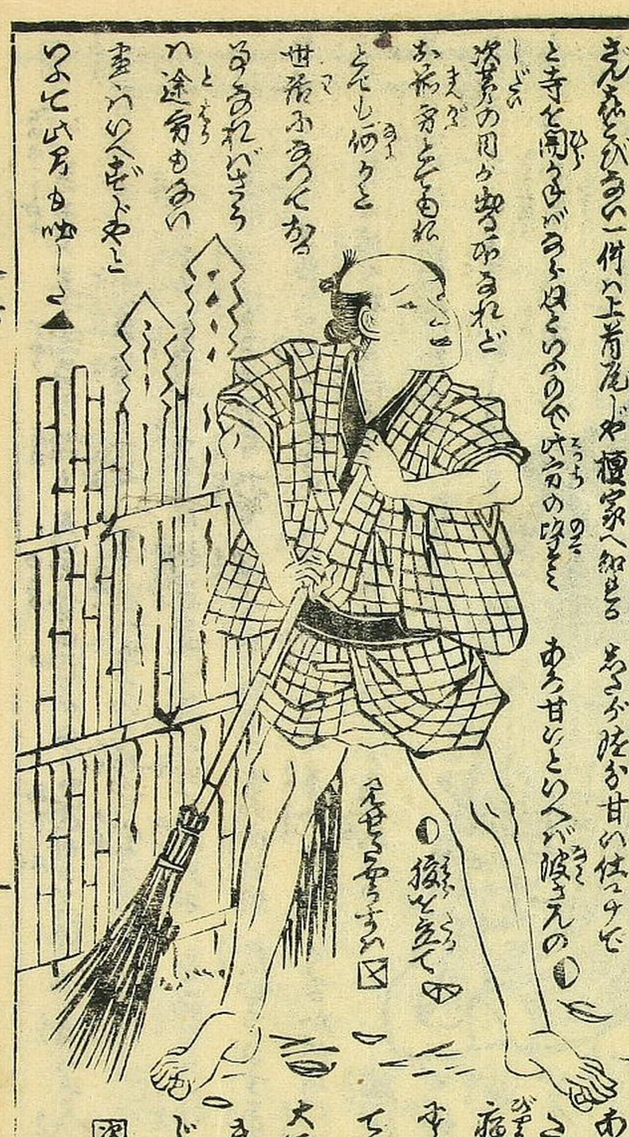
芳川俊雄閲

岩本勘造編

桜高度種画

島鮮文庫

つぎ



治四年も暮かゝる今日は沙老の十五日▲通り出だろうでは何かもあらず ☒丸で
寺子も休む日を組合はしそ松翁はお物を 実にのひかくかくろ汚まざけ 芝居
一日人まひぎ金行 歩に笑を含まるゝ おぞん 出させて内海にまるゆゑに のようで
さん森とびあい一件は上首尾じや 檀家へ知せる 志さが陸が甘い仕つけで あつ
と寺を開うけばあらぬとのみのぞ 此方の望まで あつ甘いといへば波さんの ◐ こが
次第の月が出るかあれど 病人
お祐分とも相 ま
とても何かと ていい
世話にあつてかな 大で
なあれば さう き
い途方もあい ぢや
書いのへぞとやと
いふて此月も吹しこ▲

◐猿を立て
見せる事ですい ☒

次へ

48-7954

つぎ

一芝居が五十両ならば除り
安くもあるまいと小算筆をかく一分
れかで五十両を取出し並べて居せるに
お侍は話とびお油通さんのお背打で
路用の金が出来はしこれ新するからは
此寺に世話に成てあるも何とあら
不良味でならねばいはなく
東京へ出ける事と致しませう
病人も東京の後養さん
とあらのお茶と戴ぶのく
かゝこ愛のせいうな拵がうい
との事改葺迚もなう

田舎に居ることでも面白うなれば
東京へ出るのとおふくなれど
的途もはしに後へ出て路頭に
迷ふ事もありなば由なれ
ゆと七年以来辛抱せが
お侍の姿に迷ひそみ暮くも
和尚空若を

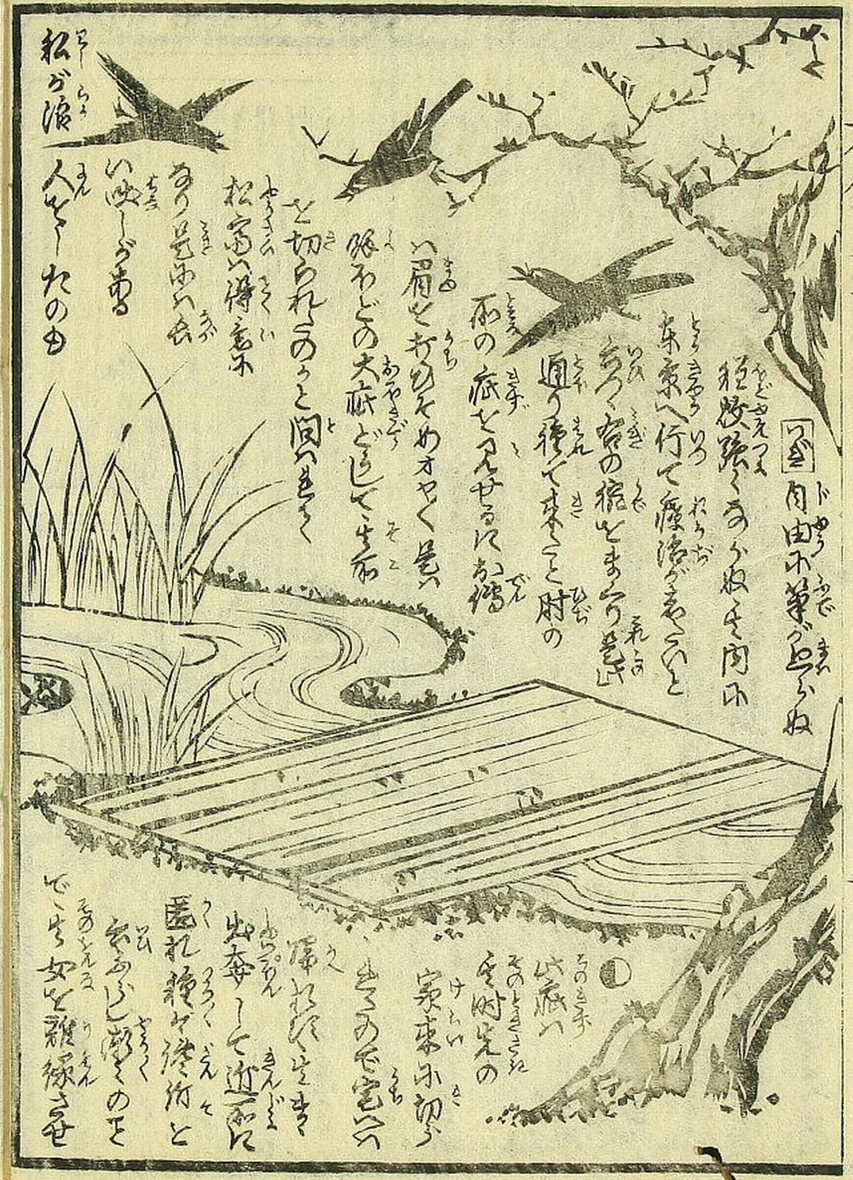
◎

徐いて金を奪ひ入之
を路用に那へ
赴むきなす事を
くるお侍に何か
稼ぎ
で保
出を
せんと
ふ地組
も自惚
お侍に

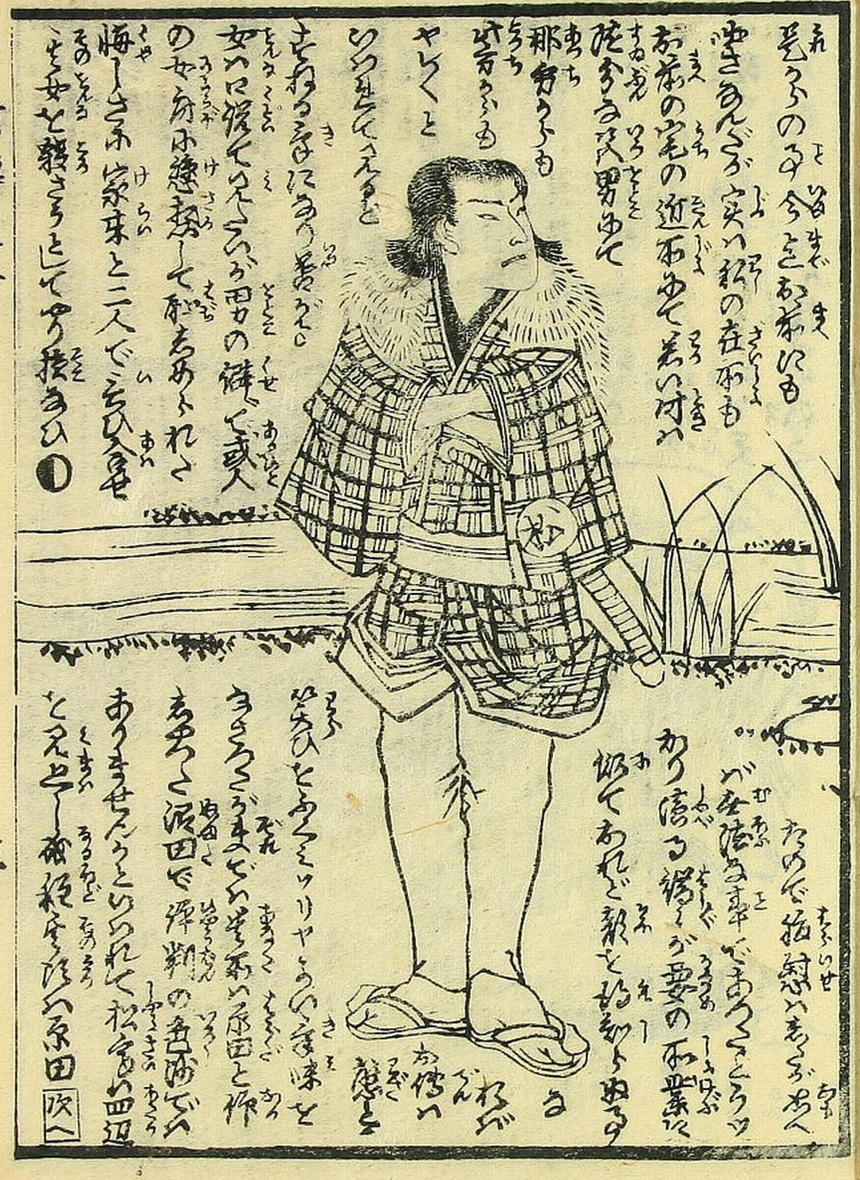
東京へ行てその
お医者にうかゝとしたいなく
ありますが其所の所親合は
如何だと急ぐは同じ
松翁もいつまでも

次へ

寒をうゝ迚
と知らねば
松翁は赤
うなづ紀私
とそもなかう
行こいと
おふくは若い
時懐私を
しこ古の
手の古紙が
此寒さのせいう
痛こ出て不供の
多本をおのさん



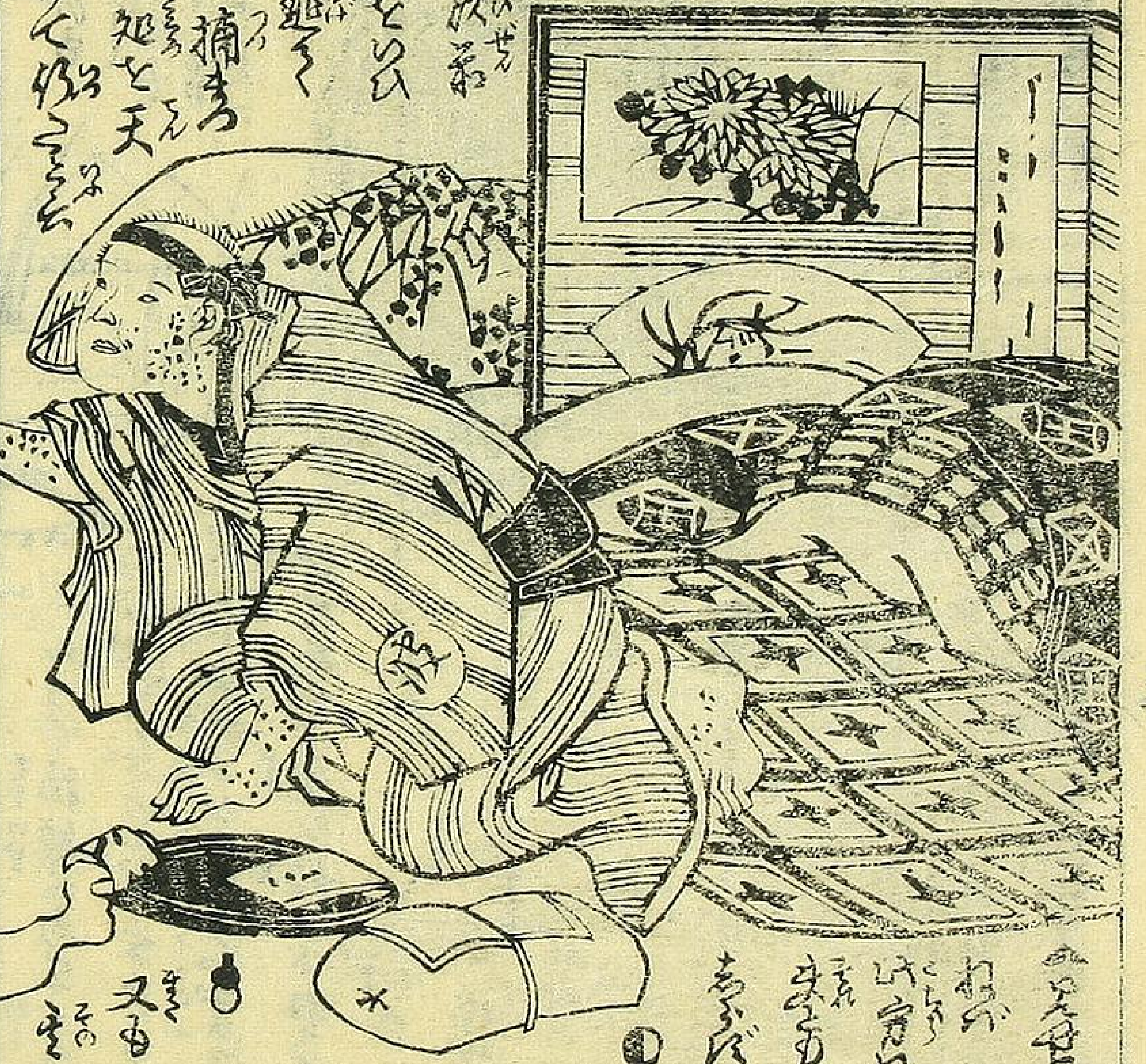
[3ウ] 月由れ筆ぐ
狂歌流くるか狂を
東京へ行て癒治ぐること
あの病を治せるてお掲
肩と打ちめオやく是
松が浪
人ぞ一九のも
と切られるのこと同じまく
松宮い得意
あの是由い
い医ーぐ由
家来小初ぐ
そのお宅へ
病れぐ
如奉ーて辺れに
医れ神ぐ修術と
そのふじ御ぐのを
ぐこそ如と雑様さ



[4オ] 是うのの今をお茶ひも
空きんぐ実い松の在所も
お茶の宅の近所ゆて若い対い
陸今う次男ゆて
那寄うも
行方うも
やうくと
いつ出てくるこ
主あるこはにあう着ろと
女いに渡てくれこう西の鎌ぐ武人
の女分お懸却ーて私をあれさ
悔ーさお家来と二人でうひ入宅
そのこと女七難さうとしてや捨ひ

[4ウ] 松ぐ浪
人ぞ一九作
次ノ一

（つゞき）要之助どのが云ひて
また知ておる 知らいで
あろうぞ我の元祖といへど世が
笑ひも謀に又を知つて云
知らず丁度十六の時分より
の天狗と申すが軍を起
て攻て来るを助けて
出る村の者の中にも其以前
は家老の子孫へ不義を云
かけて須川と申す家へ継ぐ
者あるを桑田と云ふ人が捕まへ
て既の事首を切らるまでを天
狗が夜村に来て攫つて行くらし



と言ておりますが一言もいはずなから己も
実母の了縁の秋にあるといふ訴なれ
身まで知らずに
操さを返し
今更悔む
白状なされ
どうぞ其の時
後悔なさるべき
の軍法と其れ眼を遂せず
あれど嫉みを出て丸一家後の
まさか逃亡の其の心を今はいふまいせん
晴て来るべき敵に向ふねば振とも
めと而も出つるも面に少しも

○其天ぐの所で命を助かり
其から家に
居り
しても
村へ参り
村にあり
じつは和尚の情から
まどのみくだけどの様子が
義理でしまいの甚兵衛の敵
一家中宗家へ行くと此の悪行
奴じやと思つて
と例の通りにあかれるを

次へ

つぎ

お傳は押のけて夫婦では
ありませんと見ろ、あらう仕事して
昨日は見事とも出立てるなり
一所に行ては何と思う世界
のまゝ前もあくまは世界
私が彼様で待合しまゝ紙
で一寸知らしてことせば
半所には四五日すぎて おえるまい
見は私が頼ると五十両の金取収め
郊合は見々彩々と喋し合して
お傳は己が住居へ帰り波之助
にはこれを見せ仕事
の甘くゆきしを喜ぶ

定

☒ 岩磐の夜狭四五枚を
小屋に拵らへ夫婦なりおでんは
波の助の名代を兼て和尚
宣長に長々世話になり
礼を述べ明日在更立
帰るとて
順先を返
るが宣長
自覚まかば
名残を惜む
べきに前夜
の弟にて
大きに心を

明日東京へ出立の事
を咄し
要のみ
△少しも
倍ぶ後の
用意とて
荷物は市が
ねど ☒

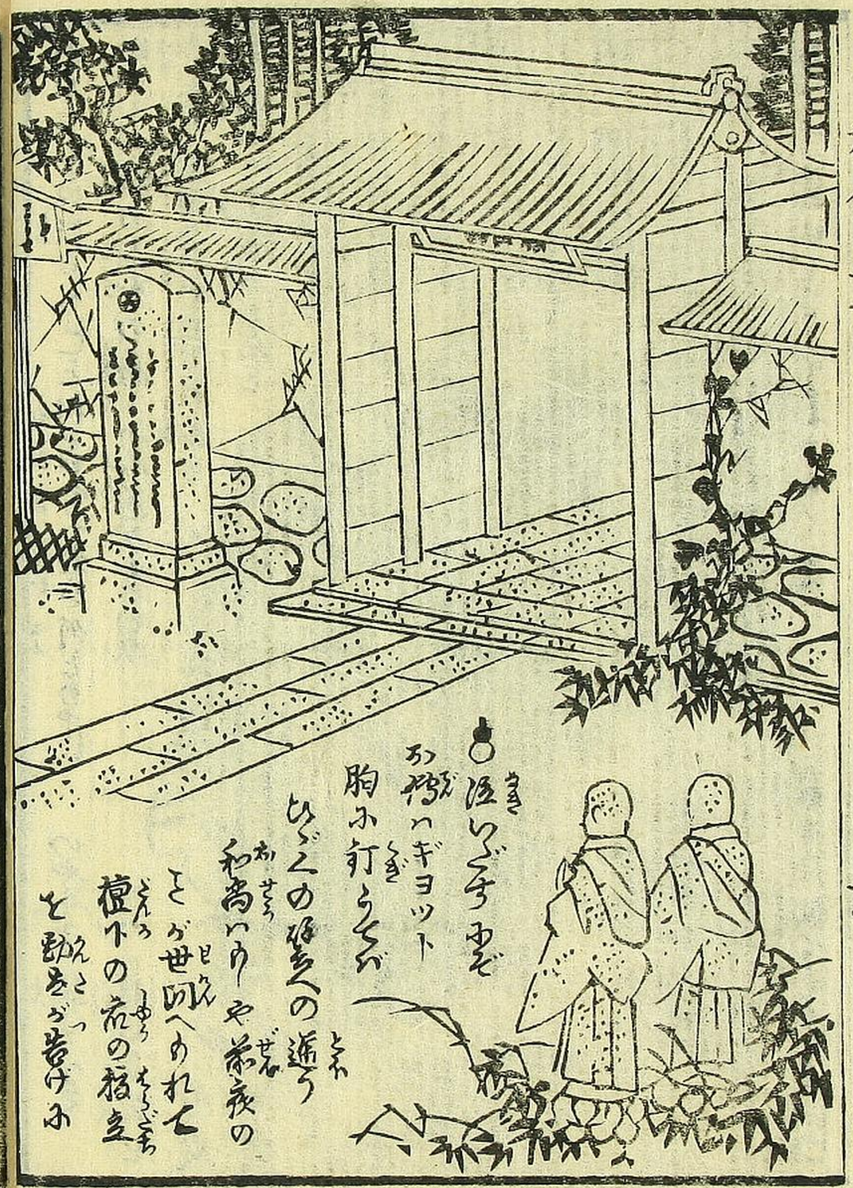
此旅人の姓名は
四編にて云ふ

扁めしまねば
孝次の事と
ふひ心なりの
銭ぶを
送り
人なり
への

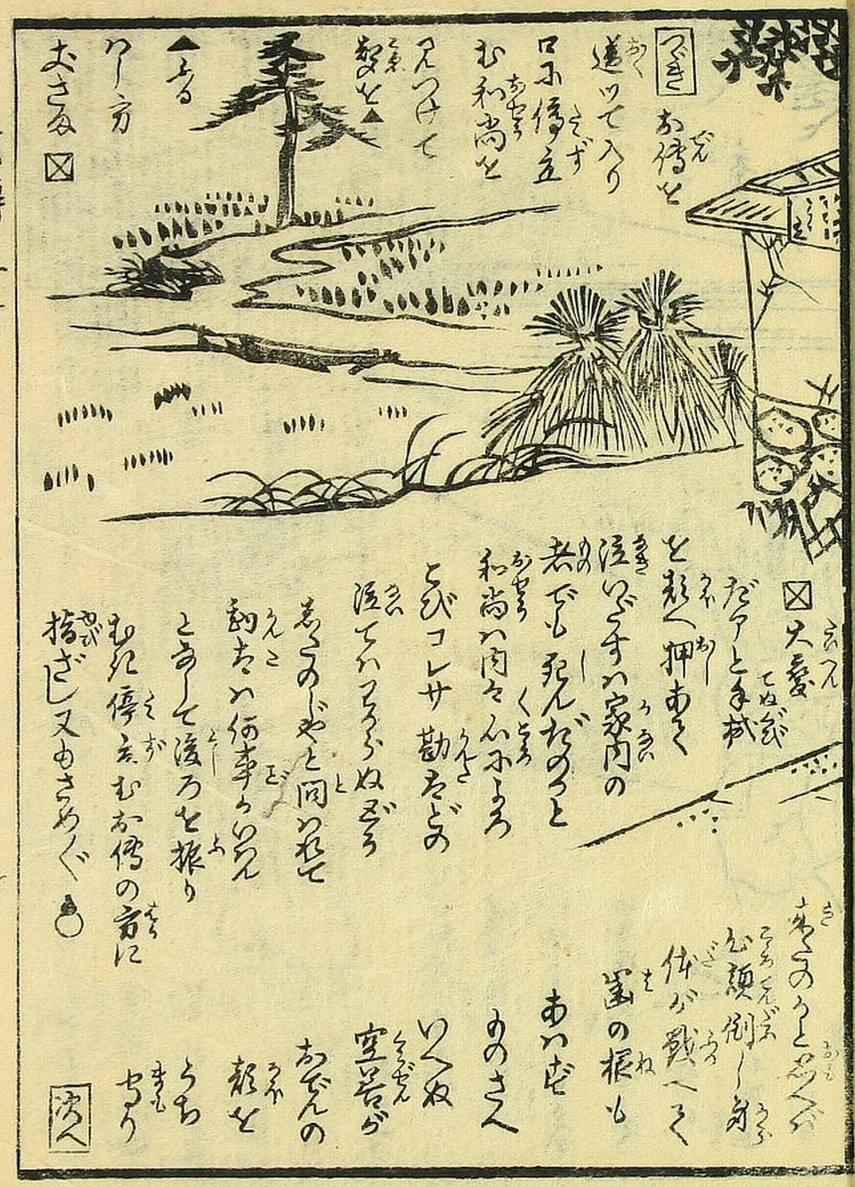
◐七ツ[illegible]と松高方へ起き何とも申し
かねしが接の支度の品に不足がある由
今より梁田へ行て是々の品を
買求めて来て下されと
粗むい度のみ事
が安いなとて松高
はおぢんから金を
両を交ところ
支度もそこく
別し田舎の田甫
路栖所もとむる山務とびも去らずに呼ぶ
[illegible]の山事と白堂を壊せ[illegible]の[illegible]
厭たず梁田をさして急ぎゆく ▼

いやまず朝まだき
お傍は接の支度を
そのへ
甲斐
ぐ
しかも
拵装て
病る夫
を助けて
いとゆゑこびもそこくに
幸山寺を立出る
とりしも音へ村人が
息せに切て走りとき

次へ



注いぐすゆゑ
お傳はギヨツト
胸に釘らてば
ひぐくの猛くの進う
和尚はりや前夜の
とが世間へあれて
檀下の前の板立
を動きが告げに

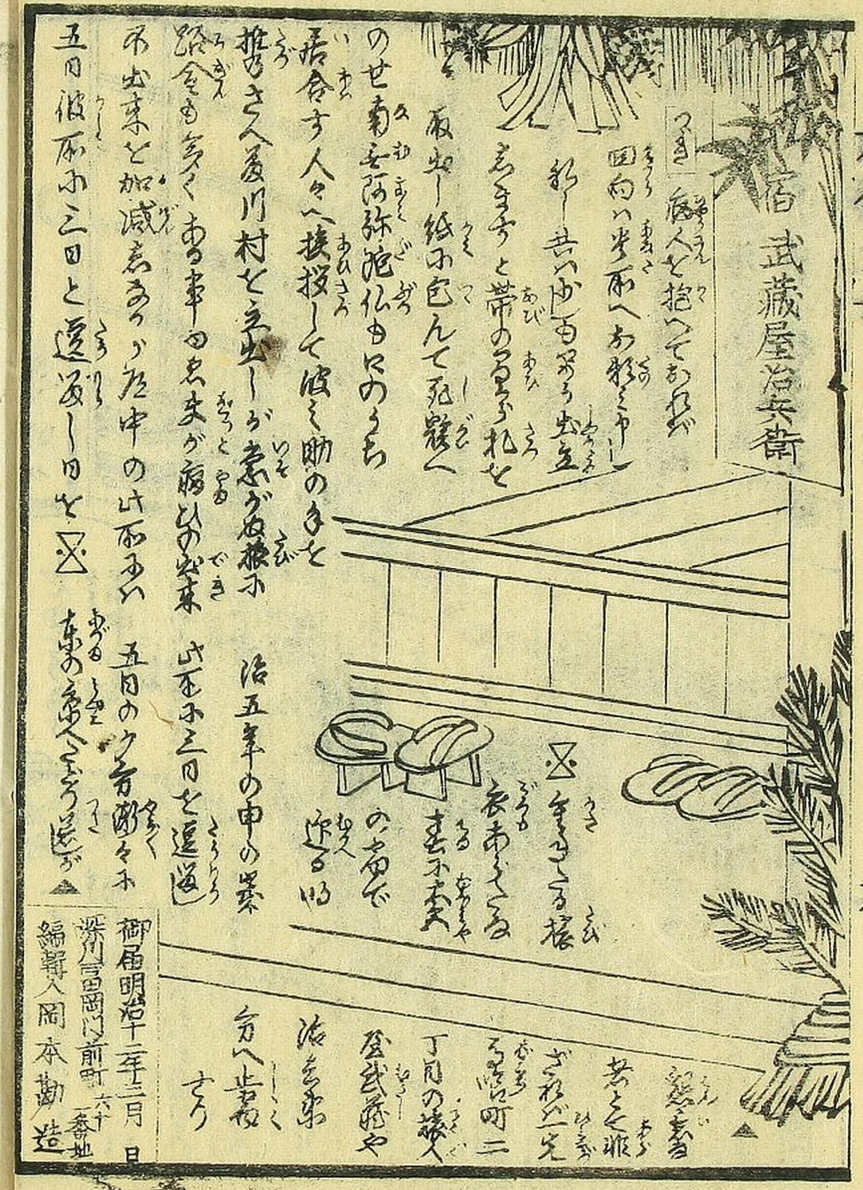


つぎ
お傳を
進ッて入り
口に傳立
む和尚を
見つけて
聚を
▲ある
ワー方
大さな
☒
☒大変
だアとま拭
を聚く押あて
注いぐすは家内の
者でも死んだのかと
和尚は内々心によろ
とびコレサ勘さどの
注てはつらぬぞう
あるのじやと問はれて
動きは何事かいれん
とまして後ろを振り
むれ停立むお傳の方に
指ざし又もさめぐ
あるのかと思へば
お顔例し身
体が戦へて
歯の根も
あはず
ものさへ
いへぬ
空若が
おぢんの
聚を
うち
ちり
次へ

つゞき
恨めしげなる
あり
横ふ
釣を
い漸に
渡を払
ひアレく
あきらん
吊て
来る
苛さう
遠ふこと少し
つく
宮若が
仔細
とよれ
釣を
も
初めて
むづれオ、さうで
あつて
祈だりでハ合点の
ゆうぬもむとも
此方の
お沙道
さんが

しいとを
おまし
こと
遥ふ
指をさし
示せる
考がんが
吹夜
何もの
ゆう村刈もの
庚申塚で
切られて
ごぎろうのを
お僧るに
のものが
見つけ
てイヤ
三ヶ
発ぎの

ぜに以つぐ今広蔵どんがさきつて死骸を⊠
⊠此方へ吊し置を
ふき夜つくろふ己が
先へ案内ふ来り
やしこアレ那所へ
戸板
ふ乗せて来やさ
と偽を言て
室の内又も殺る
ろくい此場の仕義◎
回沙匠を殺せ
きつめの毒を
とどうし
おつと無ふ
涙に
名羽
毒を
しま
ひぞれ
◎お傳夫婦ハ何ふも心れを
暫し内ふ村の広蔵を
ふ度夜へ吊こ置松が若ふ涙
ある戸殺を和尚ハ見るより顔
まづ何者なれば此扱ふ寄る回
しぞ物ごつらふ
ハ膳中の残ッに
あらう薬ハ毒
迷ふや
遺恨
を
うける
しま
人
どん
一大事とお傳ハ和
尚ふ前向ひ一方ふならバ
世話の成さお沙匠さん
のうすきバ一家内も逐ふ
しも回向を
するが
本意
であれ
どうも
しても
立ちて
其のふさびしき事
かと私ハ嘆ふ流む
側ふお傳夫婦も
嬢ふ次へ



東京区分繪畫　金
命之養生善惡鏡　金
海所櫻梅松錄　十五
單語畫解　金
大功記名と傳　四冊
其名も高橋
毒婦之小傳　東京奇聞　追々出板
鹿兒島記事　六冊讀切
獸類一覽骨牌　一箱
名入小本　数品
漢語骨牌　一箱
善惡掘分雙六　金
地本
錦繪
問屋
板主　綱島亀吉
麹町区壹番丁廿七番地
編集人　岡本勘造
浅草瓦町十二番地

010190510757

宿　武藏屋治兵衛

つき　病人を抱へてあれば
回向は坐所へお形をかし
彩し共は少百ぶつ出立
志まかと帯のるるが札を
取出し紙に包んで死骸へ
の世南無阿弥陀仏も口のうち
居合す人々へ挨拶して彼之助の手を
携さへ菱川村を立出しが意が成根に
路金も多く有事は忠夫が病ひの出来
不出来を加減志ありが居中の此所にハ
五日彼所に三日と逗留し日を☒
治五年の申の暮
此所に三日を逗留
五日の夕方漸々に
東の高へ立ち退が

☒　手をさしる様
衣あらしてる
其に夫
の者で
迎る時

懇意者
若しく非
ざれば一先
る陰町二
丁目の旅人
登武藏や
治兵衛
方へ止まり
すり

御届明治十二年三月　日
深川富岡門前町六十一番地
編輯人　岡本勘造

名毛高橋
寿婦の小傳
東京奇聞
第
三編
芳川俊雅閲
岡本勘造綴
櫻齋房種
恵
島鮮堂梓
島鮮堂梓